



Title	懷徳風雅：竹山の古体四言詩
Author(s)	水田，紀久
Citation	懷徳. 1983, 52, p. 16-28
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90610
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

懷德風雅

——竹山の古体四言詩——

水田紀久

一

中井竹山・履軒兄弟は儒医中井髷庵を父とし、その命

により、父執五井蘭洲に師とし事えた。世々脇坂侯に仕え、播州龍野に住していた中井家は、髷庵の父の代にはじめて浪華に出たが、なお故郷との往復がたえなかった。髷庵は浪華で三宅石庵に従学するとともに、この地の高名な朱子学者五井持軒の一子蘭洲と莫逆の交わりを結んだ。髷庵ら石庵門下の努力で懷德書院が創設され、師石庵は学主に推されたが、学識超絶の蘭洲も助教として迎えられ、江戸から津輕に下った一時期を除いて、生涯、書院で子弟の薫育に尽瘁した。髷庵は竹・履二子の教導を、この親友に委ね、蘭洲もまたよく髷庵の期待に

応え、二子をして後年の大を成さしめた。蘭洲、簀を易えるにあたり、竹山は選ばれて祭文とその碑銘を撰し、履軒が書篆に毫を揮ったのも、故なしとしない。

生涯、兄を立て嚆矢相和す仲の竹・履兄弟ではあったが、竹山が縦横の才幹を、経解のほか歴史、経済、詩文と多方面に發揮すれば、履軒は篤実の資質を経義、名物、韻学に沈潜させるといった具合に、おのずとその領域は異なっていた。詩に対する好尚もきわめて対照的で、兄竹山が若くより攻学の余、近体を中心に各種の詩作を試み、とりわけ近体詩の声律研究書を編んで、後進の詩作に資したのにひきかえ、弟履軒はほとんど近体は作らず、終始、古風を愛する旨言明し、おのれひとりのための古韻の心覚え書をまとめ備えたにすぎない。竹山

の集『奠陰集』が、詩の部でも上は『詩経』に擬えた四言詩から、五七言古、近体律絶はもとより、詩余にいたるまで各体を網羅する多彩な内容なのに較べ、履軒の集はなんと古体詩賦のみの作で、名も『履軒古風』と題されていて、両書の詩趣は著しく異なる。

伯叔の詩作態度に、右のような際立った相違が見られるのは、天性の才華とは別に、互譲互敬裡にそれぞれが抵觸角逐を生ぜぬ場で、おのおのわが志を舒べようとの、両者相譲らざる競争意識の現れとも受け取れる。竹山が近体詩を蒐集分類して編んだ作詩参考書『詩律兆』に、「一旦幡然以自奮、輒出唐氏以還之集、参伍錯綜、恍尔有得也」云々と序したのは、而立前一歳の宝暦八年（七五八）三月であつた。その後も取捨推蔽を重ね、それより一紀を経た四十一歳の明和七年（一七六〇）四月には、同書凡例に「初稿成乎夙齡、作輟靡常、頗歷二年所」と識している。

丁度その頃、二歳年少の履軒も、すでに吾が好むところに従い、古韻相応の用例集『諧韻瑚璉』を撰び了えて、右の一年前明和六年（七五九）八月には、「夫古之韻也簡易、本無三音学、則無韻書、出口成音、音相応成韻、如『斯而已矣』と序を冠せた。つづいて明和七年

一月には、自家用に備えた古韻集『履軒古韻』に、自ら「履軒幽人、不_レ為_二近体詩_一、而愛_二古風_一、故其用_レ韻、每循_二古韻_一、是録也、乃其自用者、曰、是吾所_レ独也、不敢以強_二人焉_一、故命_レ之、曰『履軒古韻』云」と、簡明直截な序文を掲げた。兄竹山の『詩律兆』凡例に先立つこと三か月の撰文である。おなじく、「履軒幽人、喜誦_二古風詩賦_一、時而出_レ之者、此篇是也」ではじまる『履軒古風』自序とも併せ読んで、そこに近体詩の声律研究を精力的に継続してきた兄竹山とはおよそ対蹠的な、おのれの別の行き方をはっきり意識した揚言がなされているのを見る。みずからを「履軒幽人」と三人称で呼称する心理には、やはりそれ相応の屈折を読み取ってよいのではないか。それはまた、「二つの生」の或る形でもある。

二

ことさらに古風を一枚看板にした履軒と異なり、竹山は近体を主としつつも、各体往くとして可ならざるはない才気煥発ぶりで、到底儒家の業余とは思われぬ熱の入れようであつた。当地の詩社混沌社の連中とも、常連並みに交遊唱酬している。弟処叔履軒に対しても、家事の

慶弔を含めてしばしば五言古近体詩を贈り、時には履軒の賦した作品に共鳴する意を寓した古体四言詩まで試みている。流布本の『奠陰集』は詩体別逐年順に編まれ、開巻まずこれら古体からはじまる。それは『詩経』の風雅頌に擬えた四言詩で、同書巻尾に収められた詩余とともに、作者の並々ならぬ詩才のほどを物語る。本稿では履軒の賦を嘉した作をふくめ、巻頭に排列の擬古四言詩を一瞥し、まずは『奠陰集』の読初めとしたい。

竹山一代の詩文集は、その在所に因み、淀川の南を意味する『奠陰集』と名付けられた。淀・澱・奠は去声十七霰韻に属し、音義また相通じる。幕末まで版本の上梓を見なかったが、明治四十四年（一九二一）十月、西村天因や中井天生等の努力で叢書懷徳堂遺書十五冊中の五冊（詩部一―四卷二冊、磯野惟秋校、文部五―九卷付録三冊、木崎孝校）に翻刻され、これが現在唯一の活版本である。底本その他書誌には触れていないが、これと同じ詩体別制作年順編集の写本は、龍野文庫、国会図書館、内閣文庫、静嘉堂文庫、筑波大学などにも蔵されており、当時、校訂者の手近かにも便宜があったと思われる。ところが、現在の大阪大学附属図書館懷徳堂文庫には、このような形に整理編集される以前の初稿本ともい

うべき、詩文各々ただ制作年代順に書き溜めただけの竹山手稿本二十冊（詩部八冊、文部十二冊、二帙）があり、貴重図書懷徳堂文庫中でも懷徳堂遺書として、樟香充滿するロッカーに収納別置され、とりわけ鄭重に保管されている。もともと源を同じうする兩者とて、同じ名称が冠せられるのも当然ながら、その紛らわしさをさけるため、懷徳堂遺書の名をよけて、前者を叢書活版本、後者を竹山手稿本と呼ぶことにする。また、単に『奠陰書』の巻名を称する時は、流布写本、叢書活版本を通じて、詩体別に再編されたもののそれを指す。

『奠陰集』には、作者最晩年の作まで収録されているが、安永二年（一七七三）秋、三十四歳の竹山は、それまで書き溜めた作品から抜粹して、別に詩体別の抄本を選び、『奠陰略稿』と題した。その自序に言う。「居士既不下以詩人自勉、故不専力、不務多、而歳年之積稿成、数卷、但輯録滅裂、塗抹狼籍、是以每有請者、輒書一二以塞責、漸不耐其煩也、会秋雨濛濛、夜色闌然、於是乎因永逸於一勞、灯下抄取者数多、勒成斯一卷、以備将来逐臭之需、亦出於忍睡支倦之余略也、非選也」。したがって竹山の詩は、『奠陰略稿』でまず安永二年までの作が、詩体別の詩集として自選自

編されたことになる。本書は懷徳堂文庫藏竹山手稿本はじめ写本も伝わるが、ほかに中西忠蔵の拙修齋叢書木活字本でも出版された。

『奠陰集』巻頭の古体四言詩は、題・小序・詩句・詩形とも具わるもの八編、詩題のみ存し序その他を欠くもの一編をかぞえる。惜しむらくは、現在唯一の翻刻である叢書活版本は、權威者の校訂にしては古体の部が著しく不完全で、わずか三編が何とか収められているにすぎない。これは底本の所為でもあるうが、次に便宜、これら詩題と序および詩形を、収載順に番号を付して掲げる。

擬風并小序

1、揖水、津人壽_二播人_一之父八十一也、
四章章四句

2、崧箕、詩闕

3、冬日、津人贈_二其弟_一也、津人読_二其弟幽情賦_一、嘉而作_二是詩_一、
三章章四句

4、鞠之華、津人壽_二田翁_一也、
三章章四句

5、阿郊、津人慶甫賀_二阿人君章父母六十双寿_一也、

懷徳風雅

五章章四句

擬小雅并序

6、洛之水、贈_二友朋_一也、津人慶甫送_二其友彝甫自_二浪華_一遷_二居于洛邑_一、嘉_二其得_レ所_一、而欲_二勉_二其進徳修業_一、以_二儀刑前賢_一、故作_二是詩_一也、
九章六章章六句三章章七句

7、龍之山、津人慶甫壽_二其從兄播人任甫_一也、伝云、

慶甫津人、而幼時從_レ父、屢適_レ播、与_二任甫_一為_二竹馬漁釣之遊_一、故詩中自述、如_二播人_一云、

八章章六句

擬大雅并小序

8、賀隣、津人慶甫贈_二備人達甫_一也、芸侯以_二賀隣_一

予_二達甫祖_一、祖_二壻_一關_レ之、作_二宮於其地_一、世脩_二其業_一、以致_二殷盛_一、達甫好_レ文、請_二長人弥叔_一、以記_二祖功_一、復徵_二詩于四方_一、以歌咏焉、慶甫按_二其記_一、為作_二是詩_一、

九章三章章十二句五章章十句一章八句

擬頌

9、慶長、壽_二土佐侯藤公四十一也_一、

七章一章十二句一章十句五章章八句

これら『奠陰集』の古体九編（内一編は題のみで詩を欠くこと、先述）のうち、1 揖水、3 冬日、4 鞠之華、6 洛之水、8 賀隣の五編は『奠陰略稿』巻頭に抄出再編されているから、本書の成った安永二年秋までの作と判る。5 阿郊、7 龍之山、9 慶長は自選に漏れたのではなく、明らかにそれ以後の作であることは、後に述べる。以下、各編、順を逐ってコメントを付してみよう。

三

まず、国風に擬えた作が五編（内一編、詩題のみ）ある。

1、揖水

小序によれば、「津人」つまり摂津在の作者が、同郷播磨出身某の父親の八十歳をこほいだ作とある。この播州人が誰であるか、具体的につきとめ得ない。あるいは仮空の作であるかも知れないが、他の古風がいずれも実在人物に宛てた作であるところより、本編もそのようなに推せられる。揖水が播州龍野を流れる揖保川であることは明らかである。「揖水湜々」の割注に「揖水在播」と明記している。この播州人は「父母俱存」で、豊饒たる父君頌寿の宴も一段と慶ばしい。「香魚攸躍」とい

い「有鯽有鯉」と詠うのも揖保川の由縁で、かつ佳肴饌裡の寿宴を彷彿たらしめる。本編は『奠陰略稿』所収のほか、懷徳堂文庫竹山手稿本『奠陰集』文部巻之六に見出だせる。その排列位置は、「西征詩稿序」（己丑正月）と「仁斎東涯二先生書後」（明和己丑二月某日）に挟まれているから、明和六年（七六）春、竹山四十歳の作と推定できる。

2、崧箕

詩題のみあって、その作を欠く。龍野藩儒小西澹斎家の伝来かと思われる小西文庫旧蔵、龍野文庫本は、巻頭「奠陰集総目」に「古体 九編」とあるが、実はまず7「龍之山」を欠き、この「崧箕」は詩題のみ在って詩編を欠いている。国会図書館本には、この詩題の右下に、小さく「詩闕」とある。あるいは、かの詩三百十一編、うちその作を欠くもの六編に擬えたかとも思われる。尤も、これら「南陔」以下欠詩六編はいずれも小雅の詩で、国風ではないが、擬古の作であれば、このような趣向も肯われなくはない。崧山といひ箕山といひ、名山あるいは節士所縁の山とて、必ずや清節の士に贈る意図を寓したものであろう。

案外、この編は北摂の名勝箕面山で観楓行をともし

た池田の荒木蘭皋・李谿父子あたりに贈られるはず、との類推も、あながち無稽ではあるまい。『奠陰集』巻之二には辛巳（宝暦十一年、一六六一）早春、荒木伯遷（李

谿・南山）歳暮詩に酬いた七律があり、頸尾を「心嗟 阪府文明寂、酷憶 吳江酒味香、報告二月花開日、奠北 箕南遊欲^レ狂」と詠じている。また「与 伯遷^二箕山賞楓、却寄^一 蘭皋、此日蘭皋有^レ約而不^レ果」と題した五律について、蘭皋の病氣を見舞った作やその挽詩もある。一方、巻之三所収、明和三年（一七六六）頃の七絶「吳里 途中先束^二蘭皋^一」には、「竹塢松丘断復連、監輿 坐愛^二 午晴天、箕山十月霜楓候、况又逢迎地主賢」とあり、制作順排列の竹山手稿本『奠陰集』詩部巻之二では、この七絶のあとにすぐさまの五律が見えているので、これら二首は同時の作と判る。

ちなみに、蘭皋は懷徳堂創建五同志の一人道明寺屋富永芳春の子で、富永仲基とは同母弟の間がらであるが、池田の鎗屋荒木氏を嗣ぎ、父中井覺庵や五井蘭洲に師事した竹山とは、いわば同門の先輩に当たる。竹山に長ずること十三歳で、明和四年（一七六七）十一月六日、五十一歳で歿している。また男李谿は、竹山より少きこと六歳で、上述のごとく、ともにきわめて昵懇な関係にあっ

た。「崧箕」一編を、かりにこの親知に贈ったとして、少しもおかしくはない。

3、冬日

「津人」竹山中井子慶が「其弟」履軒中井処叔に贈った作。履軒の「幽情賦」は「履軒古風」巻之一に収められている。本書の確かな成立年代は不明だが、所収作の干支が巻を逐っているので、大凡制作順に編まれていると見られる。「幽情賦」はその排列から、明和元年（一七六六）以前の作とだけは推定できる。一方、これも逐年排列の竹山手稿本『奠陰集』詩部巻之二では、「冬日」は宝暦十三年（一七六三）作の範圍に収まっていて、年代的にも「幽情賦」との先後関係に矛盾はない。履軒は壮歳、すでに幽隱の志をいだいていたのである。「履軒幽人、独坐読^レ書、思方濃、有^レ客来勸^二 其仕^一、幽人仰而笑、俯弗^レ答、客弗^レ憚、援^レ古談^レ今、問^レ難旁午、幽人竟不^レ有所^レ答焉、援^レ笔作^二 幽情賦^一、以寓^レ意、客受読^レ焉、怡然若^レ有^二 領意^一、盛^二 諸懷^一 而云」と、その賦詠動機や意味のほどが叙べられている。

履軒は明和三年（一七六六）冬、三十五歳の時、好学の菅原（高辻）胤長に召された。そして兄竹山の「弟今一劍一書笈、飄然去游公卿門」云々との「孤雁歌」に送ら

れ、賓師として上洛するが、在京一年で翌年冬には帰坂している。その間の詞藻『洛納奚囊』は、履軒手稿の懷徳堂文庫本と別に、やはり自筆の卷子本四巻が伊丹の岡田氏柿衛文庫（財団法人に改組）に伝わっている。これは同家五代前の祖箸斎が懷徳堂の門人だったことによる。わたくしは羽倉敬尚翁の肝煎りで催された懷徳堂回顧展（昭和三十年九月二十七日—十月二日、於阪急百貨店、主催日本短冊研究会、後援朝日新聞社・懷徳堂記念会）で、はじめて原卷目睹の機を得、以来、もっぱら俳書蒐集をもつて鳴る柿衛文庫への認識を新たにしたことであった。この「幽情賦」は、高辻公出仕の四年ばかり前の作ということになる。

竹山がこの履軒の賦を嘉した擬古詩に、題を「冬日」と与えたのは、「幽情賦」が「春日遅々、鳥鳴啁々」を二か所繰り返しているのに対したのであろう。齡而立にしてすでに隱退を志向し、屈原や陶淵明張りの作を賦した弟に、兄は

瞻_二彼冬日_一、短々厥景、君子有_レ憂、厥辭維長、
彼何人斯、錦衣狐裘、之子孔_レ褒、厥辭維富、
乃如_レ之人兮、可_二与晤歌_一、誰作_二此詩_一、兄弟匪_レ佗、
と、全幅の共鳴を惜しまなかった。

「彼何人斯」（小雅、節南山之什）・「錦衣狐裘」（秦風、終南）・「乃如之人兮」（邶風、日月）・「可_二与晤歌_一」（陳風、東門之池）・「兄弟匪佗」（小雅、甫田之什、頌弁）は、いずれも『詩経』の句そのものであり、「瞻彼——」や「之子——」は詩の慣用句に拠ったこと、もとよりである。また「君子有——」も詩をはじめ、多く經書に見られる成句であり、「厥——維——」は『書経』風の措辞である。いわば「冬日」三章、章四句ごとく詩書の奪胎ならざるはない。兄竹山はわざわざ擬古体の試作をもつて、弟の「幽情賦」に酬いたのである。そして、竹山もまた、明和九年（安永元年、一七三）四十三歳の四月、師礼をもつて遇された堀田出羽守正邦に陪して、一旦江戸に下るが、六月、正邦の死をもつて意を青雲に断ち、兄弟して終生出仕することはなかった。

4、鞠之華

「津人」竹山の「田翁」寿賀の作。『奠陰略稿』にも収められているから安永二年以前の作だが、竹山手稿本『奠陰集』には見えないので、制作年代が確定できず、かつ贈られた当人の「田翁」も誰か分らない。1や5・7・8のように、その国名が記されていないから、おなじ「津人」かと思われる。『奠陰集』巻之五「山田翁小

伝」の山田蘭芝（高麗橋筋住、安永八年歿、九十一）、卷之六「義斎先生六十寿詩序」の篠田徳安（飯岡義斎、立売堀南裏町住、寛政元年歿、七十三）、『履軒古風』卷之三「福田翁寿辞并序」の福田某（塩町住、七十寿）などは、おなじ在津の長寿者で、氏に田字を帯びる。その他、摂津以外の住人で墓誌銘を撰んだ備前の人角田一美（本姓寺田、天明三年歿、七十三）があるが、これは遺子より示された行実ではじめて知った人物として、この備人ではあるまい。いづれにせよ、その菊寿を賀せられた「田翁」は「我聞厥人、中寿維百」と詠まれ、その限りではさきの在津諸老も、ともに該当しない。

5、阿郊

この編は竹山手稿本『奠陰集』詩部卷之五を参看するまでもなく、年代がはっきりしている。阿波藩大坂蔵屋敷の邸吏岡田武雅は夫婦同庚であった。次男の南山岡田君章はおなじく邸吏をつぎ、片山北海の詩社混沌社にも加わって、竹山とも交游があった。竹山より十二歳年少であったが、安永六年（七七）両親の還暦にあたり、中春二月十四日、蟹島の酒楼で寿宴を催した。これは、その折の作である。竹山はその二章「彼阿之岡、双鳳集止、父兮母兮、朋寿六十」に、「君章新製双鳳掛軸、以

介寿、故及之」と自注している。安永六年、「津人慶甫」四十八歳であった。慶甫即子慶は竹山の字である。祝宴の席上、混沌社友の葛子琴は五言排律を詠み（『葛子琴詩抄』卷之四）、細合張庵は七律を作って（『小郡詩囊』）、ともに南山の父母六十双寿を賀した。

南山はこの年秋八月帰国の命を受け、冬十一月、父とともに阿波徳島に移った。竹山は帰郷する南山に七古を賦して贈り（『奠陰集』卷之一）、曾之唯、細合張庵らも七律を作り（『曼陀羅稿』『小郡詩囊』）、それぞれ南山の帰阿を送っている。また竹山はまる十年後の天明八年（一七八）、「賀岡君章二尊七十双寿」七絶を贈っている（『奠陰集』卷之四）。ともあれ、「阿郊」は安永六年の作として、安永二年編の『奠陰略稿』に未収は当然であった。以上が擬風編で、次は擬雅編に移る。

6、洛之水

「友朋」といい「其友彝甫」というのは、友人中村兩峰のことである。兩峰、名は有則、字は君彝（夷）、長二郎と称した。摂津住吉郡平野郷の人。元文五年（一七四）の誕生というから、竹山より十歳年若である。二上山を仰ぐところから、兩峰と号した。若くして孤となり、姻戚金崎修夫に養われたが、その宅が懷徳堂に近かったの

で堂に学び、のち帷を京に下ろした。履軒の後室は兩峰の妹である。天明二年（一七八二）一月三日、四十三歳で歿し、京三条白川橋東、仏光寺廟所に葬られた。竹山はこれのために「祭中郎君夷文」を草し、かつその墓誌銘も撰している（『奠陰集』卷之九）。墓碑は今に恙ない。

この祭文に、「洛邑之遊既下、及_レ_ニ_ニ居於仁里、杜_レ絶世之利、深韜晦而不_レ仕」とあり、墓誌銘には「弱冠得_レ病、頤_ニ于京師、累歲而瘳、遂家焉、而隱居講授、清苦洛約、恬如也」とある。兩峰の上洛は病氣療養のためでもあったらしく、かつその年代は、ほぼ明和二、三年（一七五〇）の交と思われる。「送_ニ君彝如_レ洛_ニ誦_ニ書」七絶が竹山手稿本『奠陰集』では詩部卷之二、明和二年のあたりに見出だされる。そして本編「洛之水」も、おなじ巻の、先述明和三年冬履軒上洛を送る「孤鴈歌」の次に収めてある。また、竹山には「送_ニ中村君彝之_ニ江都_ニ序」なる大作があり（『奠陰集』卷之六）、なかに「今茲丙戌夏四月、君夷告_レ別、如_ニ江都_ニ云々との一節がある。丙戌は明和三年である。多分、兩峰は上洛と前後して下江したと想像される。とにかく、「洛之水」はほぼ明和二、三年頃の作品であろう。竹山三十六、七歳、兩峰二十六、七歳の時分である。

兩峰の京都移徙には、何かと友人大村子図（永全、彦太郎）が幹旋したようである。兩峰の住まいは三条柳馬場西北、堺町通りであつた。四章「子図膚敏、定_ニ彝甫之宅、在_ニ楊之西_ニ矣、在_ニ參之北_ニ矣」の双行注に、「子図為_ニ君夷_ニト_ニ居于堺街、在_ニ楊馬場西參条陌北_ニ」とある。本編は九章あり、竹山の古体では長編に属するが、小雅に擬えて上洛行を送った本編と、歿後の祭文とを併せ誦すると、竹山の友誼が惻々として胸奥に迫る。

7、龍之山

これも小雅に擬えた編で、「從兄播人任甫」の還曆を寿した作。ただし、竹山手稿本『奠陰集』文部卷之十のみに収載。排列個所は天明八年（一七八八）の辺りで、この年、竹山五十九歳。幼時父と帰郷した竹山が、故郷龍野で「竹馬漁釣之遊」をともし、_レ「龍之山兮、韶年嬉戲、並駁並馳、維予与_レ尔」の想い出を持つ從兄で、当年六十歳、つまり竹山に長ずること一、二歳の年恰好の者は誰か。中井家系図を案ずるに、竹山の伯父広之（父忠藏髻庵の直ぐ上の兄）、龍野藩家老柳生広次の嗣となり、享保十三年（一七三〇）次子を儲く。名は致遠、字は子任、軍治と称す。号は龍山。竹山に長ずること二歳。延享三年（一七四六）十九歳で藩儒藤江熊陽の嗣となり、熊陽

の女婿として家を継いだ。「任甫」の呼称も、その字「子任」とびったり適う。さすれば、この藤江龍山こそ、「其從兄播人任甫六十」の条件をすべて充たしている。

藤江龍山、安永中は奉行として藩政に参じたが、博学強記、國典にも通じ、劍法を能くした。江戸詰め中、寛政十年（一九六）七月二十八日歿した。七十一歳。芝西久保神谷町浄土真宗光明寺に葬る。龍野小宅寺山にも分骨され、墓碑を建立。墓碑銘は股野玉川撰。「龍之山兮、有竹猗々」と詠い出される本編「龍之山」は、1の「揖水」同様、故郷龍野の山河を指すが、その雅号をも響かせた詩題であること、もとよりである。「国歩孔艱、君子有微猷」はその行政の手腕を、「君子既耆、旅力偕々」はその筋骨の強健を、それぞれ礼賛した句である。制作年代より、『奠陰略稿』に未収なのは当然である。わたくしは、龍野の石原元吉翁より藤江龍山夫妻の碑文を恵与された。翁の芳情を鳴謝する。

8、賀隣

大雅に擬した作。題名は備後国尾道、向島東沖合に浮かぶ加島（賀島）の謂いである。制作事情は小序に見える通り、芸州侯からこの加島を賜わり、ここを開いた

尾道の素封家泉屋松本氏の子孫から、「長人弥叔」撰の祖功記を示され、詩を徴されたことによる。「達甫祖」松本重政は孝義を嘉賞せられ、寛文二年（一六六二）冬、二代藩主浅野光晟よりこの裸島を下賜され、三十余年を費して植林と景観の美化に尽くした。元禄三年（一六八六）参覲交替の帰途、この島に立ち寄った四代藩主浅野綱長は、重政・重長父子に謁見を許し、開墾の労をねぎらって時服を賜わった。元禄九年（一六九四）二月、重政は松本家の榮譽を長えに子孫に伝える碑文を撰し、同年秋、定稿を石に勒して、この賀島中腹に建てた。石碑はいまも老樹のもとに無事である。

四代の孫松本達夫は文雅を好み、上洛して古義堂伊藤東涯に就き、郷国の詩人菅茶山をはじめ、ひろく上方や西国筋の文人と交遊したが、「長人弥叔」、即ち長州藩の文学鶴台澁弥八に賀島の詩を囑した。同国長州人を介して、達夫より詠賀島の詩を頼まれた鶴台は、宝暦十年（一七六〇）春、東下の途次、尾道の達夫を訪れ、伴われて親しく賀島に渡り、ついに達夫の祖先の勲功と島の美景を写した一文を撰した。時に鶴台五十二歳であった。歿後、安永七年（一七九六）刊行の『鶴台先生遺稿』巻之六には「遊賀島記」が収められているが、賀を鶴字に刻し

である。尾道市立図書館所蔵の『賀島記』一卷には、鶴台自筆の無題同文が収められていて、これには賀字を用いる。この巻は三三三〇〇纏で、他に伊藤東所、江村北海、平賀中南等の記も貼り収められている。わたくしは尾道御出身の島居三青先生の高配で、榎本清人翁撮影の写真を恵まれた。排列は次のようである。

賀島詩巻序 明和四年丁亥之夏六月望日

平安伊藤善詔序

無題 元禄九年丙子春二月 松本重政

賀島真景 福原五岳画

無題 宝暦庚辰春三月

長藩文学滝長愷弥八

賀島記 明和四年丁亥秋

北海江邨綬君錫撰

嘉島記 明和壬辰人日

青蓮院法親王侍読安芸平賀晋人識

賀島は、芸州藩主三代の来駕があったゆえ、「駕島」の称も容され、またそれは「嘉島」でもあった。ともに修辭の佳文字である。いま竹山は、松本達夫から示された滝鶴台の撰文を按じ、この大雅に擬えた「賀隣」一編を作った。その年代は、竹山手稿本『奠陰集』文部巻之

五に「戊子正月」とあるゆえ、明和五年（一七六六）、不惑前一歳の初春作と判る。本編は『奠陰略稿』ですでに九章の形に整えられているが、はじめは十二章で、手稿本所収形は「三章章十二句、五章章十句、二章章八句、二章章九句」と、現在所伝の形より三章二十六句分長かった。のち、まず「後二章当削」と頭欄書入れにあるように、自ら末二章十八句を削り、さらに、そのすぐ前の一章八句をも除いて、いまの形に整えたようである。末二章の自注には『新古今集』や『古今集』の歌が万葉仮名表記で引いてあるが、これはやはり竹山としては、九章の、

既作_レ好歌、贈_レ彼吉士、何以申_レ之、維学之緝熙、
洙_レ与_レ泗方渙々矣、方_レ之舟_レ之、道阻且遠、維彼哲
人、在_レ紫之陽、牖_レ我後生、俾_レ不_レ迷_三于方_一、

で打ち切り、これを結章として、「哲人指_三朱子_一、牖開明也」と、自家学統を踏まえた自注を添えるに如くはない。手稿本には、このあと作詩の参考にした鶴台の撰文を掲げるが、そこでは「滝氏遊_三賀島_一記」と呼んでいる。

9、慶長

擬頌の編である。竹山が「土佐侯藤公四十」すなわち

土州藩主山内侯の四十賀を寿し得た機会は、生涯に二度ある。一は八代藩主山内豊敷（一七九一—一七九七）が延享五年（寛延元年、一七八六）に迎えた四十賀で、時に竹山十九歳に当たる。その二はその嗣子九代豊雍（一七八一—一七八九）のそれで、寛政元年（一七八九）がその嘉辰にあたる。竹山六十歳。ところで、その手稿本『奠陰集』を綴くと、詩部卷之七、寛政元年の位置にこの作が見出だされ、制作事情ははっきりする。思えば前者未冠の作では、やや当を得ない。かつ安永二年に成った『奠陰略稿』には、まだ収められていないことも納得できる。

豊雍は父豊敷の朱子学を中心とする教学方針を遵守し、好學、藩校教授館を整備し、また藩政にも意を用いるなど、中興の令主と称されたが、四十歳の寛政元年五月、江戸より帰国後、いくばくもなく病いに罹り、八月二十四日歿した。遠祖山内一豊の功績、閨歴や逸事を詠み込み、封国土佐の名産をもあしらった竹山の賀編「慶長」を納めて、わずか数か月、その年の秋には世を去っている。詩の注疏より勘えられた年号を吉語題に、編んだ頌寿の作ではあったが、それが却って識をなした嫌いがなくもない。竹山が山内侯に、この四十賀編を奉るにいたった経緯は、まだ未調査である。

四

以上、瞥見したように、竹山の擬古四言詩は、下、詩余に及ぼした幅広い詩作を、上、詩源に遡っての編と言うべく、ともに送別、寿賀または祝賀の挨拶として作られている。従って竹山の作詩は、どこまでも近体五七律絶を主とし、時に五七古、排律を賦しながら、稀に社交の古体四言や詩余を試みたことになる。『詩経』の詩に擬えた作は、弟の履軒も勿論作っているが、履軒の場合、「中唐、題三杜子美之真一也、四章三章章四句一章六句」とか、「曄花、頌三人麻呂一也、四章章四句」（『履軒古風』卷之三）などという、和漢の詩聖や歌聖を詠んだ作のあるのは、竹山のそれとやや趣きを異にする。竹山は格別親昵な同時代人への儀礼として、填詞もしくは古体四言詩という風雅な新古詩形に託し、祝意や親愛の情を賦詠献呈している。そこには、これら風変りな韻文は、一般的な古近体五七言詩より一層文雅かつフォーマルであるとの、作者の好尚的認識が働いていたことは確かであろう。

残暑去りやらぬ九月初旬、竹山手稿本との照校に、待兼山の懷徳堂文庫をひさびさに訪れたわたくしは、和漢

書目録掛長津田恭司氏より、懷德堂勤仕を天職とされた藤塚誠二翁が、去月十七日、九十二歳で永眠された由を承り、「念彼碩人」のおもい一入なるものがあつた。

(癸亥白露)

(関西大学教授)

『懷德堂考』初印本の複製について

懷德堂・友の会の発足を記念して西村天囚の名著『懷德堂考』を複製いたします。従来大正十四年十一月刊行の重印本(菊版洋装本一冊)が知られていました。それも市場に出るのは稀でありましたが今回その初印本(和綴二冊)が出現し、友の会ではさっそくにそれを購入し、同体裁にて複製することになりました。初印本は明治四十三年二月より大阪朝日新聞に「懷德堂研究」と題して連載されたものを、社友有志が同年三月『懷德堂考』と題し上巻を刊行、翌四十四年七月に同下巻を私に印行したもので、その部数僅かに上巻三十五部、下巻七十五部にすぎず、その存在すらほとんど知られていない稀書であります。一部を一般に頒布しますので至急にお申込み下さい。

『懷德堂考』(初印本。和綴上下二冊。帙入。付録(重印本口絵二十三図・人名索引)。

頒価 四千五百円(送料別三百円)。★会員特別頒価 三千六百円(送料別三百円)。友の会事務局扱い。